

根源におけるヒットラリズム (一)

北島平一郎

目次

- 一 ヒットラー思想の実像
- ヒットラー関係文献
- ヒットラーと世界的思想家
- ヒットラー思想の短絡性
- 世界大戦敗戦の復讐
- 兵士政治家としてのヒットラー
- 二 「我が闘争」第一巻「二つの審判」
- ① 民族と種族
- ウイーンと独逸合邦
- 反議会主義
- 汎ゲルマン主義 (der alldeutschen Richtung)
- 人口問題と生活圏 (以上本号)
- 国家、種 (der Art)、経済、マルキシズム (以下次号)
- 世界戦争 (Der Weltkrieg)
- 戦時宣伝 (Kriegspropaganda)

革命

崩壊の原因 (Ursachen des Zusammenbruches)

ジャーナリズム、芸術

君主と革命家

アリア民族、ゲルマン種族

ヒットラーの日本民族蔑視

犠牲

シュウリイ

② ドイツの敗亡と再生

一九一八年の敗北

大衆の動員

兵管と政治結社

③ 闘争へのステツプ

三 むすび

一 ヒットラー思想の実像

ヒットラー関係文献

ヒットラー (Adolf Hitler) の思想を検討することから、所謂ヒットラリズムとファッシズムの関係をさぐるうとするのが、この小論の目的となる。ヒットラーについては、その研究書なり歴史書なりは各国で実に夥しく出版されているが、⁽¹⁾彼の思想の根源はやはり「我が闘争」(Mein Kampf)にあることは疑いを入れない。しかし勿論、この

意味におけるヒットラーの思想を知るのにも、これだけがすべてではない。このほかに、ヒットラーの思想を知るさまざまな演説があり、これらはそれぞれの書物に編集されていることは勿論よく知られている。⁽²⁾その上には、ドイツをはじめとして各国の種々の外交文書にヒットラーの命令なり、言説なり、通信なりが収録されているが、これも衆知のところである。

これ以外、ヒットラーの秘密文書、あるいは会話といった類いのものもあるが、これらについては稿を改めて叙述したい。

ここにまた、一九八三年五月に、ヒットラーのにせ日記発見事件というものがあつた。⁽³⁾これは、世界中に喧伝されて大騒動になったことは、記憶に新しい。⁽⁴⁾

なお更に、ヒットラーの思想を端的に知り得る書物がある。Hitler, *Memoirs of a Confidant* というのがそれで、これはヒットラーの側近くに仕えたナチ党の経済問題関係の事務官が、ヒットラーの言説を一九二九年から一九三三年にわたって記録していたものを集めて、一九七八年に刊行されたものである。この英訳版は、一九八五年に、エール大学 (Yale University) によって出版されている。

このほか、Speer's *Inside the Third Reich* という古典的なもの、その他もあるが、これがヒットラーだというもの、やはり「我が闘争」をおいてはなほ如くである。自分で書いたものだけが「聖書」だということにはならないのが、この世界の常識ではあるが、我々と時代を同じくしていた人物については、自分で書いたものだけが信憑性があるとしなければならぬであろう。この点、ヒットラーは、逆にいえばまがうかたなき自分を批判され得る数少ない歴史上の政治家の一人であるといえるのかも知れない。

ヒットラーと世界的思想家

ここでは、右述によりヒットラーの思想、観念を付度するため、まず「我が闘争」をとりあげる⁽⁶⁾。そしてなおその中の第一部「一つの審判」(Eine Abrechnung)につき論述を行う。ヒットラーの思想とその傾向については、実にさまざまのことが言われているが、真面目なものとして彼の思想が種々の偉大な思想家の流れを汲んでいるという解釈がある。その一つには、一九三一年の九月から一九三八年の一〇月まで駐独仏大使を勤めたアンドレ・フランソワ・ポンセ (André François-Poncet) のこれに関する記述がある。彼はヒットラーの観念につきのべて、「しかし一方、アドルフ・ヒットラーの観念は、決して独創的なものではない。それは道化服の元祿模様が、寄せ鍋のようなものである (Elles (les idées d'Adolphe Hitler) ne sont qu'un habit d'arlequin, un pot pourri.)。彼の書物のどの部分にも出典は、明記されていない。しかしそれらは、容易に跡づけることができる。そしてそれは、非常に多数で、また種々のものがある」とのべ、これらの人物を「フィヒテ (Fichte)」、クラウゼビッツ (Clausewitz)、ダーウィン (Darwin)、「ゴビノ (Gobineau)」、H・S・チャムベレン (H. S. Chamberlain)、「ムルンホルディ (Bernhardi)」、スウエーデンの哲学者キヤレン (Kjellen)、「歴史家トライチュケ (Treischke)」、ラムブレンヒト (Lamprecht)、「人類学者グンター (Günther)」、ウォルトマン (Woltmann)、「それにワグナー (Wagner)」、ニーチェ (Nietzsche)、「スミンクラー (Spengler)」、ラツェル (Ratzel)、「ハウスホーファー (Haushofer)」、メレル・ファン・デン・ブリック (Möller van den Bruck) 等である」と言っている。彼は、ヒットラーの思想を単に「我が闘争」だけに限定せず、その全体を頭にもって発言しているようであるが、それを寄せ鍋のようで、出典は明記されておらず、それはまた多種多様である、と言っている。この点甚だとらえどころがないようであるが、またこ

れらを明確に跡づけることができる、とものへている。フランソワ・ポンセの回想記に科学的厳密さを求めてもそれははたけ違いであろうが、ヒットラー研究者の中には、このようにヒットラーを偉大な思想家と考えてしまふような言説をなす人もそれぞれに存在している。それがこの場合、フランス人の手になっているのは、興味のあるところである。⁽⁷⁾

ヒットラーの思想探究を一人や二人の研究家の分析で、ことをすまそうというのは今日、既にして愚であるが、ヒットラー研究の古典たる W・L・シャイラー (William L. Shirer) は、彼の「第三帝国の興亡」(The Rise and Fall of the Third Reich) で、フランソワ・ポンセのあげた学者中の哲学者二人、すなわちゴブヌ (Gobineau, Joseph Arthur, Comte de (1816-82)) と H・S・チェムバレン (Houston Stewart Chamberlain, 1855-1927) をとりあげて、この二人によってヒットラーの思想は強く影響されたと言っている。このことは勿論広く知られているが、前者は、その人種思想でアーリア人 (the Aryans) を諸々の人種の中の最優秀なものとし、これを白人種の中の宝石と呼んでゐる (The jewel of the white race)。そして西ドイツ住民をアーリア人に比定している。H・S・チェムバレンは、北欧住民でドイツ人を含むチュートン (the Teutons) をとりあげ、これがギリシア哲学、芸術、ローマ法等を受けつぐに足る優秀人種と規定し、ジュウリイを論理の果てにけなしめて、反セミチズム (anti-Semitism) 原理を打ちたてている。これらの言説に立ち入ることは、ここではさておくとして重要なことは、こういふ著名な学者二人をシャイラーが、ヒットラーの思想と関係づけていることである。そしてこれから、フランソワ・ポンセの説くヒットラーが諸々の思想家の観念やイデーを受けついでいるという主張が、それなりに裏づけられて生きてくるということである。すなわちフランソワ・ポンセのヒットラー観念が、意義をもってくるということである。⁽⁸⁾

論

ヒットラーの思想構成に著名学者のそれらが流入しているということ、右述の点からフランソワ・ポンセほど、この点を重々しく考えさせる言説はないようであるが、ジャーナリストでヒットラー研究家の J・C・フェスト (Jochim C. Fest) は、同じテーマについてハンス・フランク (Hans Frank) の言説をひいてヒットラーの読書は、ニーチェ、チエムバレン、ランケ、トライチュケ、マルクス (Karl Marx)、ビスマルク (Otto von Bismarck) 等に及んでいるが、ほとんどそれらは原書の読破ということではなく、第二、第三の孫引きダイジェスト版によるものであった、と言っている。つまりヒットラーは、若年の頃、ウィーン時代、またランズベルグ (Landsberg) の獄中等で大いに読書したことは確かである。そしてそれらは種族論、反セミチズム論 (anti-Semitic pamphlets)、チェーントン人論 (Treatises on the Teutons)、種族神秘論 (racial mysticism and eugenics)、人種学、ダーウィニズム (Darwinism)、歴史哲学等に及んでいるが、彼のこれらの読書の対象の多くは、擬似科学的第二義的著作 (pseudo-scientific secondary works) によるものが多かったということである。すなわち彼によれば、ヒットラーの知識の源泉は、パンフレット類とか小論文、または古典の大衆解説書といった類いのものがほとんどであった、ということになるのである。⁽⁹⁾

マザー (Werner Maser) もフェストと同じく、ハンス・フランクの名を引いて、ニーチェ以下同じ思想家の名をヒットラーが思想上影響を受けた人物としてあげているが、彼はその他、実に種々の人物の名をそれとしてあげている。⁽¹⁰⁾

しかしここで重要なことは、先にもふれたようにヒットラーの思想内容そのものなのであって、その系譜ではな

い。そしてその内容を忖度する限り、そしてそれを「我が闘争」第一巻に限定して考える限り、ヒットラーの思想、観念は、甚だ短絡的であつて単純明快なものであつたといわねばならないのである。種々のヒットラー研究者によつて実にさまざまの思想家の名前が、ヒットラーが思想形成上影響を受けたものとして、その一端をここにも瞥見した如くあげられているけれど、そしてこれを肯定、否定いずれの側においても証明することは、不可能であらうけれど、およそヒットラーの思想、観念は、そういった著名思想家のいずれとも重なるようには思えないのである。ただここでいえることは、先述のゴビノとH・S・チェムバレンの二人は、確かにその人種論、人種不平等論でヒットラーに強く影響し、彼の反ジュウリイ主義哲学形成に一役買っているということである。このことは、各研究者が等しく指摘するところである。フェストもこれに関し、次の如くのべている。「ヒットラーは、ゴビノの精巧な原理をデマゴグに使用できるように単純化し、現代の不平、不安、危機的情景をもっともらしく説明するてだてとした。ベルサイユ、ゆきすぎたババリア・ソビエト共和国、資本主義の害毒、モダン・アート、夜の生活、バイドク等はすべて、低級種族が高貴なアーリア人種を破滅さすために試みてきた伝統的闘争の姿である。……そしてその背後にはジュウリイが立っている。」と。

世界大戦敗戦の復讐

ヒットラーの「我が闘争」第一巻を内容的に検討するのが小論の目的であるけれど、それをそうしたのは、小論にまとめる分量の問題がその主たる理由であるが、いよいよここというヒットラー思想の内容について結論を先にのべてみると、それは一言、次のようになる。すなわちこの限り、ヒットラーの思想なり観念なりは極めて明快、短絡的であつてそれは、ドイツの第一次世界大戦における敗戦の仇討ち、復讐をめざしてドイツをその目的のために再構成

し、ドイツ精神を振起してこれを復讐の鬼と化せしめることを内容としていたことになるのである。そしてそれ以外のものではないといわねばならない。「我が闘争」第一巻の中において、彼がオーストリアがドイツとの結合を忘れてスラブ化したと非難攻撃することも、ジュウリイを極端にさげすみまた弾劾することも、すべては第一次世界大戦のドイツ敗辱の原因をここに求めてこれへの復讐を説くためである。ドイツ再構成のために、議会主義を否定し、道徳、倫理の退廃をなげき、現在の如くならば君主制の復活が望ましいなどと説くのも全くこの目的から出ている、と考えねばならない。教育、宣伝を重視して、将来にそなえることを強調していることも、また軍の忠節による再編成が彼の大きな題目であるのもすべて、来るべきドイツ再戦をめざしての準備のためといわねばならないのである。

かくヒットラーは、至極単純明快に復讐を根幹として、その所論を展開しているのである。復讐戦のために明日にそなえ、国家をその目的のために再編成するべく、ナチスの一大運動を起してこれを実現してゆこうとするのである。ヒットラーの「我が闘争」第一巻は、かくして全くその思想をひるめ、その達成の方法論を展開したものと断定して可なりといわねばならない。そしてこれのみがヒットラーのあやまたざる思想、観念であったと考えねばならないのである。

兵士政治家としてのヒットラー

右の事柄を「我が闘争」第一巻に即して証明しようとするのが、小論の目的となる。なおちなみに言えば、これらのヒットラーの思想、観念をばぐくんだものは、言うまでもなく軍隊であった。勿論彼が軍隊に入る前の思想形成が問題となるが、それはドイツのビスマルク帝国、カイザーのドイツ (Kaisereich) であることは何ら疑いを入れない

い。これらの右翼的強権国家主義の教育を受け、そのまま軍隊に入って、自称二度も鉄十字勲章を受ける軍との抱合、適応ぶりがヒットラーを生粋の軍人中の軍人としたことはこれもまた否定し得ない。かくして軍から直接ドイツ労働党 (Die Deutsche Arbeiterpartei) に入り、政治家に転身するヒットラーは、その限り、全くの兵士政治家であつたのである。そしてここで先述のヒットラー研究者ぶりに、筆者もヒットラーは、クラウゼビッツの「戦争は別途の手段によって追及される政治である」という思想に生涯的な影響を受けていたと主張して、大いに大向うの喝采を期待して可なりと愚考するのである。とまれヒットラーは、兵士政治家として軍人精神を発露し、大戦争に負けて口惜しい、だからこの恨みを晴らそう、という極め付に単純な幼児的発想でナチス運動にとびこんでゆくのである。かくして「我が闘争」第一巻は、この彼の思想を明快単純に吐露した一巻の書物であるにすぎないといわねばならぬのであらう。

(一) ヒットラーについて、またナチズム (Nazism) に関しての書物、記録が汗牛充棟ただならぬものあることはここに喋々述べて置かぬ。ここにはただマザー (Maser) とフェスト (Fest) の二著作に關し、その参考書目が存在しているのみである。(Werner Maser, Der Strum auf die Republik, Frühgeschichte der NSDAP, Rividierte Neuausgabe von „Die Frühgeschichte der NSDAP“, 1973, Deutsche Verlags-Anstalt GmbH, Stuttgart. 及び Walter 関係著書 (Wichtigsten Documente) 約二三〇種類。記録文書とマキエメンテーション (Akten und Dokumentationen) 一四種類、非公刊史料 (Unveröffentlichte Quellen) 約二千種類が列挙せられている。なお同書、一九六五年版を用いた次の和訳がある。ヴェルナー・マザー、ヒットラー、村瀬興雄、栗原優共訳、紀伊国屋書店、一九六九年。Joachim C. Fest, Hitler, trans. by Richard and Clara Winston, first published in Germany by Propyläen, 1973, this translation, first published in the U.S.A., 1974, and published in Pelican Books, 1977. ムルダハ、マッターラー関係書誌として約三三二種類の書目が列挙せられてゐる。この書物の和訳として「ヒットラー」ミアヒム・フェスト著、赤羽龍夫、関楠生、永井清彦、佐瀬昌盛訳、河出書房、一九七五年

刊がある。日本で一九八八年一〇月、ヒットラー関係資料一、七二五点が、某書店から売りに出された。

- (2) 例えば、ヒットラー總統演説集、工藤長祝訳、鉄十字社、昭和十五年。ヒットラー總統演説集（一九四二年一月—一九四三年三月）、外務省政務局第四課、昭和十八年五月、内容はすべて独文、Deutscher Dienstより採録。Dr. Henry Picker, Hitlers Tischgespräche im Führer hauptquartier, Hitler, wie er wirklich war, Seewald, 1977.

- (3) Newsweek, May 2, 1983, Special Report, Hitler's Secret Diaries, pp. 20-37, and Newsweek, May 9, 1983, The Storm over, The Hitler Diaries. コットラーの日記が発見されたと言われるのは、一九八一年に「スターン」(Der Stern)なる西独週刊誌が発表したことからである。すなわち同誌はその時、同日記六〇巻の購買を開始したという。一説では日記五〇冊ともいうが、それぞれ八×二インチ、厚さ二分の一インチというノート・ブックですべて厚紙を人工皮でおおった所謂ハード・カバーつきといわれた。内容は一九三二年半ばから、ヒットラーの死の前二週間までの日記といわれている。種々の問題を含み、今回特に重要視されたのは、ヘス (Rudolf Hess) の英国行とヒットラーのユダヤ人観である。ヒットラーは、周知の如く自分で筆をとること稀で、これもあるいは口述されてでき上がったのではないかという。ヒットラー最後の日、日記は彼とともにベルリンの總統官邸の倉庫にあり、これが、一飛行機によつてそこから運び出されザルツブルグに向つたが、途中で墜されてしまった。このヒットラーの失われた日記物語が世に知られたのは、ヒットラーの飛行隊長 (Hitler's chief pilot) であつたハンス・バウアー大将 (Gen. Hans Baur) からで、彼は敗戦後九年間のソ連邦抑留の後、帰国してこれを自分の回顧録の中で公表した。これにとびついたのがスターン誌の記者ゲルト・ハイデマン (the Stern reporter Gerd Heidemann) であり、この記者が日記塔載飛行機操縦者フリードリッヒ・A・グントフィンガー少佐 (Major Friedrich Anton Gundfinger) を追尾して、彼の墓をドレスデン近村のベルネルスドルフで発見したというのである。これは一九四五年四月二日建立の日付をもつた一六基のドイツ将校の、それらの一つであつたという。そして飛行機墜落の現場にかけつけた農夫エルベ (Richard Elbe) を尋ねあて、その証言で、日記は現場に急行したドイツ兵の一隊に持ち去られたという事実をつきとめた。そしてこれらの経緯の後、日記をすべて購入することになるのである。しかしスターン誌はこれから先 (すなわち購入筋) のことは、断固公表を拒否したのであつた。この日記の真質については、百家争鳴となるのであるが、これを真とする人にトレバー・ローパー (Hugh Trevor-Roper) あり、またノース・カロライナ大学のワインベルグ (Gerhard L. Weinberg) あり、決して端倪を許さないものがあつた。

これらに関し最も重大な一つは、この日記がヒットラーのジュウリイ絶滅思想の明確性を欠いているということである。すなわちヒットラーは、この悲惨な悪事に近づいたり、考えたりすることを従来から忌避していたという事実があるが、それはしなくもこの日記から証明されるというのである。これは大へん重大な事実で、これをつきつめて考えるところの謎が出てくるようである。当然、日記の眞實問題にもかかわってくる如くである。そしていま一つの重大関心事は、ヘスの英国行が、当然日記に如何なる真相をもつて言及せられているかということである。

ヘス事件についてワインベルグは、この日記からヒットラーは、ヘスに英国において、チャーチル (Winston Churchill) の平和処理案に如何なる反応が生じているかをさぐるために、一九四一年五月にヘスをそこへ秘密裡に派遣したことが読みとれるとしている。またダンケルクにおける英軍の敗退に、ヒットラーが彼のタンク隊 (Panzer Division) を送ってこれを殲滅することがなかったのは、彼がそうしなければ、英国でヒットラーの平和意図が読みとられるであろうと推測したからである、と日記に依拠して主張している。

いずれにしても日記は、多くの謎をはらみ、そして謎は謎を呼び、これが前記空前のジャーナリズム騒動となつたのであつた。

(4) Newsweek, May 9, 1983, The Storm over The Hitler Diaries pp. 10-14, ヴォットラー日記の眞實論争が、激しく巻き起つたのはこの情勢下当然のことであるが、眞實説側は、新たにドイツ巡察将校 (Third Reich security officer) Wilhelm Spaulなる人物、ナチスの捕虜 Erwin Hautler 等をくり出してその眞なることを主張し、スターンの資料を英国で公開する権利を得た The Sunday Times もこれに加わつて、事態は大ごととなった。その一説によると墜落飛行士の一人が重傷を負いながらレザーのハンドルのついた大きな木箱を守ろうとして、これに必死にしがみついていたといった報告も出てくるのであつた。しかしくだんのトレバー・ローパーも次第に日記偽物説に傾くようであり、次のように言い出す。すなわち「I will not say that there is not a mixture of genuine documents and forgeries. 本物の資料と偽物がまじりあつていないとは言ひ切れない」²¹⁾

そしてハンブルグで開かれた日記眞實論争の公聴会では、ヒットラーとナチス研究者として抬頭してきたアービンング (David Irving, Hitler's War, 1939-1942, 1977, Hitler's War, 1942-1945, 1977, & The War Path, 1933-1939, 1978 等をあらわした) が飛入りして日記の偽物説をマイクをつかみとつてわめき出し、カメラマンとつかみ合いの喧嘩になるといった騒動も

起つたのであった。この情勢で、日記偽物説がだんだん勢いを得てくる。そして日記の内容についても、その中に「うちのドクター・ゲッベルス君 (that little Dr. Goebbels)」といったヒットラーが滅多に使わないような表現があるし、一九三九年の独軍のポーランド侵寇について、日記に、「国民には何らの報復も加えないように」というヒットラーの命令のあった記述があり、これが真実なら、この命令はドイツ軍によって完璧に無視されたことになる、といった指摘も出てくるのである。

これら諸説乱れ飛ぶ中においてもハイデマンは、ついに日記入手のソース、何時、誰からそれらを得たかを明らかにしないのである。そしてニューズ・ウィーク誌による調査で、問題の墜落飛行機の乗員はほとんど救出されず機体とともに焼け、その焼けただれた遺体の骨片等が運び出されて、ベルネルスドルフの墓地にほうむられたという事実が明らかになるのである。そしてその時いわれる如きヒットラーの日記等の資料は、発見されず、機外に持ち出されたものは、少数の文書と三枚の窓ガラスだけだったという。ヒットラー日記の偽作性は、更に彼の対米宣戦の記述がそこないこと (Gordon Craig, *Stanford and Proclamations (Hitler's utterances)*, from 1932 to 1945, edit. by Max Domarus) とどう偽書がすでに出版されているのに照らしてもその偽作性が証拠づけられるとする。こうした種々の主張や証言、証拠から日記は偽物と断定され最後、関係者の処罰や、追放につながってゆくのである。しかしこれが依然ミステリー性を失わないのは、そこに一つの信憑性たたよ物語があるからである。すなわち、ベルネルスドルフの人々は、その飛行機が墜落したのは、確かに一九四五年四月二一日の午前五時四五分頃であり、その飛行機には何を隠そう偽日記ならぬヒットラー自身が乗っており、彼はベルリンのバンカーではなくこの機内で死んだと信じていることがあるからである。彼らは、ヒットラーは無名戦士の一人として彼らの墓所に眠っているのだと言ふ。彼の一人は言ふ。「I have always assumed that Adolf Hitler himself was in the Plane and buried in our cemetery」 which were uttered by Walter Göbel, a son of late former mayor of Börnersdorf. 私だ、マドロン・ビットラーは「この機内にいて、そして我々の墓所に葬られてゐることは勿論のことと信じてゐる」云々。

- (5) Hitler, *Memoirs of a Confidant*, ed. by Henry Ashby Turner, jr., trans. by Ruth Hein, Yale University Press, 1978. (the Head of Economic Policy Section) Otto Wagener (April 29, 1888-August 9, 1971) ナチス・S・Aの参謀長、党執行部の経済政策課長 (the Head of Economic Policy Section)、同局長等を歴任した。また短期間ではあるが、経済閣僚も経験してゐる。しかし奇妙なことに、S・Aのナチ歴史は、彼の名をのせていない。またほとんどのナチ歴史研究が、彼の名をN・S・D・A・

Pの協調組合国家主義者 (an advocate of corporative state) としての名のみで取り扱っている。これは、彼が一九三三年の六月というナチ政権の早い時期にヒットラーの恩寵を失って失脚し、このため彼は、意識的にナチ文献からその名と行動を抹殺されてしまったからであるという。近年、ナチ研究、特にその初期活動のそれに彼の存在と活躍の再認識が重要とされるのは、これらの事柄からである。ワグナーの失脚の原因は、また彼が、ヒットラーと対抗したナチ党初期の大立者ゴレゴール・ストラッサー (Gregor Strasser) の一派に属していたためとも考えられている。

ワグナーのメモワールは、彼が一九四六年にウェールズのブリジエンド (Bridgend) に抑留されていた間に書かれた。それは、三六冊の英国軍事演習用のノート・ブックに記され、二三〇頁に及んでいるという。ワグナーの書物は、スビーアー (Albert Speer's Memoirs) のヒットラーやナチスに関する記録や、ラウシュニング (Hermann Rauschning) のそれらと並ぶ一級資料としての価値があると考えられているが、ワグナーは、ヒットラーやナチ領袖の会話やスピーチをノートし、記憶し、また他からの情報等によってこれらを再構成して、これを十数年後に先述した如くノートに書き表わしたのであった。そしてそれが、彼の書物の原典となっている。

ワグナーのヒットラー言行記録は、ラウシュニングのそれと比較して甚だ信憑性が高いとされる。それは、後者はヒットラーとの直接会話が二三回を数えるのみで、しかもその半数程度だけが単独会話であったとされるのに、ワグナーは、失脚まで常時ヒットラーと接し、随時会話し、議論を聞かされ何かと指示されていたとされるからである。またヒットラーの旅行にもしばしば随伴していったとみられることその信憑性を裏付けている。

- (9) Mein Kampf von Adolf Hitler, Erster Band, Eine Abrechnung, 1934, und Mein Kampf, Zweiter Band, Die national-sozialistische Bewegung, 1934, Verlag Franz Eher Nachfolger, G.m.b.H., München 2, No. Mein Kampf von Adolf Hitler, Zwei Bände in einem Band, Ugekirzte Ausgabe, Erster Band : Eine Abrechnung, Zweiter Band : Die national-sozialistische Bewegung, 149.-150. Auflage, 1935, Zentralverlag der N.S.D.A.P. Frz. Eher Nachf., München. Adolf Hitler, Mein Kampf, Complete and Unabridged, fully annotated, Editorial Sponsors : John Chamberlain, Sidney B. Fay, John Gunther, Calton J.H. Hayes, Graham Hutton, Alvin Johnson, William L. Langer, Walter Millis, Raoul B. Roussy de Sales, and George N. Shuster, trans. under the auspices of Dr. Alvin Johnson, of The New School for Social Research, Reynal & Hitchcock, 1939, New York. Adolf Hitler, Mein Kampf, with an introduction by D.C.

Watt, Reader in International History in the University of London, trans. by Ralf Manheim, Hutchinson of London, first published as *My Struggle* by Hurst & Blackett 1933, this edition, first published, 1969, second impression, November 1969. Adolf Hitler's: *Mein Kampf*, Eine Kommentierte Auswahl von Christian Zentner, Paul List Verlag KG, München, 1974. マルロン・ヒャラー著、真鍋良一訳「吾が闘争」上巻、興風館、昭和一七年五月七日発行、同一二月一日第三刷発行。同下巻、昭和一七年八月二日発行、同一二月一日第二刷発行。ヒトラー「マイン・カンフ」研究、石川準一郎著（合冊普及版）、国際日本協会、昭和一八年六月一日発行（二万部）。ヒトラー「我が闘争」室伏高信訳、第一書房、昭和一五年六月一日発行、同年九月二七日第八刷発行（ここまでで二二万九千部発行）。以上マイン・カンフに関し、筆者の手許にある刊行物の一部である。

- (7) Souvenir d'une Ambassade à Berlin, Septembre 1931-October 1938, André François-Poncet, Flammarion, 1946, pp. 83-85. しかしフランソワ・ポンスエ「これらの偉大な思想家の名をヒトラーに影響したものととして列挙しているが、決してそれののめりこんではいない。これにつき、次のように言う。「彼の仕事の全体からみてヒトラーは、これらの深い研究を行い、また大抵の場合直接原典の勉強をしたとは思われない。彼は書斎人ではなく、行動の人である。読むよりも話すことが多い。彼は自己充足型の人間で、その興味は大衆の注意をひくもの、道ゆく人の関心をひくものに向う。彼は、空中にただよっているものを聴音機のラッパが空中に開いて、音を吸収するように集める。人は、この綱領の中に、一九世紀のドイツを通じて流布していた思潮を見出す、というのは、種族主義、ゲルマン民族擁護論、反セム族主義、反キリスト教、デモクラシー弾劾、アウタルキー称讃、力、軍国主義、戦争等の礼讃、神聖ローマ帝国復活の野望等は、ここへきて新しく出現した言説ではなからである」」。

- (8) The Rise and Fall of the Third Reich, A History of Nazi Germany by William L. Shirer, Simon and Schuster, New York, 1960, pp. 97-113. ライト・ヒットマン (Leibnitz) カント (Kant) ヘルダー (Herder) ノンホルト (Humboldt) ナッシング (Lessing) ゲーテ (Goethe) シラー (Schiller) バッハ (Bach) ベーターマン (Beethoven) どのような辞典たとえ英和辞典にみえぬも必ず出てくるこれらの名前は、すべてドイツ人であり、またフィヒテ (Fichte) ヘーゲル (Hegel) トライチケ (Treitschke) ニーチェ (Nietzsche) リヒャルト・ワグナー (Richard Wagner) も御多分にもれずこの範疇に属するドイツ人思想家で、一八、一九世紀世界思想、情緒を支配した人々であるが、ヒトラーもオーストリア・ドイツ人

であるという意味で、当然これらの人々の思想的、情緒的影響を一般教育的に受けていたことはいうまでもないと考えられる。フィヒテの人種論とヘーゲルの国家論、国家を最高の道徳とし、人類の最高の義務は国家の成員であるとしたそれ、戦争を礼讃し平和を怠惰とみる思想等、ビスマルクに強く影響するとともにヒットラーにも影響したとされている。トライチュケはサクソニー (Saxony) 出身であったが、どのプロシア人よりもプロシア的であったとされ、ヘーゲルと同じく国家を最高の道徳とみ、人民の徳は従属であり、戦争は人間の最高の表現であるとする。プロシアの軍事的栄光は、どのドイツ詩人や思想家の最高傑作よりもすぐれた宝玉の輝きをもっているものと、また平和は人類の恥辱であると喝破している。ニーチェも国家は、道徳的とか不道徳的とかは無関係で、戦争、征服、復讐の意思であるとし、「ツァラトゥストラかく語りき」(So sprach Zarathustra) に「汝、平和は新しき戦争のための手段としてのみ愛せよ。短き平和こそ幸いなれ。我は汝に告ぐ、働くべきでなく、闘えよと。平和に在るな、勝利にあれよと。……戦争と勇氣こそ慈悲に数倍せるものなり」と、のべている。同じ書物でニーチュが「汝、女性ニオンコックのもとにまかるときは、鞭を忘るな!!」といっていることは、あまりにも有名である。ヒットラーは常に「民族社会主義ドイツを知りたければ、ワグナーを理解せよ」と、言っていたが、ワグナーはシュウリイ憎悪、その金権支配忌避、デモクラシー、議会、唯物主義、そして凡人ブルジョアジー罵倒にこりかたまっていた。歌劇「トリスタンとイゾルダ」(Tristan und Isolde) は、ワグナーの最高傑作とヒットラーは称するが、これはドイツ中世の英雄叙事詩である Nibelungenlied に題材をとっている。その中の主人公である Siegfried、彼の妻 Kriemhild そして Brunhild、Hagen 等は、その名を耳にするだけで、常にドイツ人の魂をゆりうごかす彼らの偶像であった。ヒットラーは、ワグナーを通じてこれらを絶えずドイツ人の心に振起していた。

ヒットラーに最も強く影響した人にゴビノと H・S・チェムバレンがある。アーリア人種優秀論は、主に彼らから由来している。ゴビノは、歴史と文明の鍵は人種にあると喝破し、人種の優劣が人々の運命を説明すると説く。人種問題が、歴史の他の要素を支配しているのである。彼は外交官、またライターとして幅広く活躍し、その著書 "Essai sur l'inegalité des races humaines, 3 vols" で、人種論を展開し、ワグナー、ニーチュに影響した。人種を白色、黄色、黒色にわけ、優秀な白人の中でもアーリア人が最優秀人種であるといっている。アーリア人の起源を中央アジアに求めているが、これにはフランス人、英国人、アイルランド人、ライン、ハノーバの住民が属するとし、ドイツ人の中では西独の人種をこれに比定している。

ローマ帝国においても、野蛮なゲルマン人がこれを破壊したことが、文明の扉を開いた。四世紀において、ローマ人は下等

種族と混血していたが、ドイツ人は比較的純血を保ちつづけたアーリア人種であったとしている。

チェムバレンは、"Grundlagen des Neuzeitens Jahrhunderts" に於いて、"チャートン (the Teutons) 族としてのドイツ人の優秀性を前者と同様に主張し、ジュウリイとゲルマンの二人種のみ純血を保つものだとしているが、ジュウリイをけなしてゆく。ギリシア哲学と芸術、ローマ法、そしてキリスト (Jesus Christ) の人格、この三位一体が人類の輝かしい遺産であり、これが一九世紀の本質的基礎である。そしてこれにふさわしい唯一の人類は、ドイツ人であるとしている。彼はキリストはジュウリイではなく、アーリア人であると主張している。ジュウリイは純血を保つといひながら、セム族、砂漠のペドゥイン (the Bedouins of the desert)、そしてヒッタイト、最後にアモリヤト (the Amorites, アーリア人) の混合したものである。"

チェムバレンは、ウィルヘルム二世 (Wilhelm II) 第一次世界大戦、ヒットラー、ドイツ第三帝国そして第二次世界大戦に最も強く影響した思想家であった。英国チェムバレン首相 (Neville Chamberlain, May 1937-May 1940) を叔父に持つ英国人であると共に R・ワグナーを義父とする彼の異様な数奇な運命がそこであった。

- (9) Hitler, Joachim C. Fest, op. cit., pp. 297-320. 上記に於けるハンス・フランク (Hans Frank, 1900-1946) は、ドイツのナチ法務官で、法務関係の重職を歴任した。ハンリッ法務大臣、ドイツ法務大臣、ドイツ法律アカデミー院長、ドイツ法律協会理事長等、後、ナチスによるポーランド征服後は、ポーランド占領地民政総長、そして最後ついにポーランド総督 (Governor General) となった。生粋のナチでヒットラー結党以来の同志。一九四六年一〇月、ニュールンベルグ軍事法廷で絞首刑となった。その時の悔録の中で彼は、ヒットラーは、ランズベルグの獄中でニーチェ、H・S・チェムバレン、ラング、トライチケ、マルクス、ヒンズマルク、独ならびに連合国指導者の世界戦争回顧録等を読みふけていたと書いた (フエルト、前掲書、三〇〇頁)。マザーも同様のフランクの引用をなしている。

- (10) Der Sturm auf die Republik, Werner Maser, op. cit., pp. 82-106. ハンス・フランクの条は、八七一-八八頁。マザーのあげてくる前掲以外の特別の各は、Frank Wedekind, Otto Ernst, Arthur Schopenhauer, Dante, Stifter, Lessing, Peter Rosseger, Sophokles, Homer, Aristophanes, Horaz, Ovid, Remans, Rosaldis, Shakespeare, Wieland, 等である。また著者自身の著書その他次の等をあげている。Otto Hauser : Geschichte des Judentums, Werner Sombarts : Die Juden und das Wirtschaftsleben auf seine weise durchgearbeitet, Ludwig Gumplowicz : Der Rassenkampf, Georges Vacher de

Lapouge : L'Arven, son rôle social, 1899, deutsche Übersetzung, 1939, Der Arier und seine Bedeutung für die Gemeinschaft.

(11) Hitler, J.C. Fest, op. cit., pp. 314-15.

(12) Alphonse Daudet, La dernière classe, récit d'un petit alsacien.

これは、アルフォン・ドローデーの「最後の授業」とよく対比され得る。一は、わずか一〇頁に満たない短篇小説で、アルザス・ロレーヌの失陥に悩むフランス人の胸に復讐の聖火を点せしめ、これを第一次世界大戦の勝利に導く。他は、二〇年の歳月を費やし、数千万人のドイツ人を動員し、果ては数百億ドルの戦費を世界に空費せしめ、数千万人の人々をまきこんで破滅的大戦争を惹起し、最後失敗に終る。人心を喚起せしめることいざしがまざるかという好例である。ただし、これを比較するのは、戦争を礼讃するの意では勿論ない。

二 「我が闘争」第一卷「一〇の審判」

① 民族と種族

一にあげた目的に従って、ここで「我が闘争」第一卷の内容をできる限り原典に忠実に要約することを試みる。

原典は、第一卷を一二章にわけてある。1. Im Elternhaus (父母の家) 2. Wiener Lehr und Leidensjahre (ウィーン時代の勉強と苦闘) 3. Allgemeine politische Betrachtungen aus meiner Wiener Zeit (ウィーン時代の政治的觀察) 4. München 5. Der Weltkrieg (世界戦争) 6. Kriegspropaganda (戦時 propaganda) 7. Die Revolution (革命) 8. Beginn meiner politischen Tätigkeit (政治活動の開始) 9. Die „Deutsche Arbeiterpartei“ (ドイツ労働党) 10. Ursachen des Zusammenbruches (挫折の原因) 11. Volk und Rasse (民族と種族) 12. Die

erste Entwicklungszeit der Nationalsozialistischen Deutschen Arbeiterpartei (ナチスの初期の発展)。

以上であるが、小論においては必ずしもこの区分に従わず、筆者の理解の便宜によって項目分けを行った。

ウィーンと独逸合邦

ヒットラーは、何よりも民族の強さとそして民族の団結、純粹さ(血の)を信奉しこれを主張した。この点ダーウ
イニズム(Charles Darwin, Darwinism)の影響が、ファシスト軍人その他類似的目的的政治集団に及ぼしてい
る強さを考えねばならない。すなわち「食糧の獲得、再生産、自衛」の三つを最も効果的に行つた民族が、民族闘争
に勝ち残るといふ理論(「適者生存」(survival of the fittest))から民族の力を矯め、これを強化して来るべき世
界闘争にそなえようといふ運動が盛行するのである。⁽¹⁾

ヒットラーはオーストリア国籍のドイツ人として生をうけたから、オーストリアの歴史はよく知り、またこれに関
心をもって読書したと思われる。彼はオーストリア・ドイツ人であつてドイツ国宰相への道を歩むので、そこに独逸
国家関係への特別の配慮があつたことも否めない。しかしヒットラーは、多民族国家オーストリアを彼の民族理論か
ら信用しない。そしてオーストリア国家団結の中核を、ウィーンに求める。⁽²⁾これをオーストリア団結の頭脳であり、
意思であると規定している。ヒットラーは、芸術家たらんと志した人間であるから、ウィーンの美に対するあこがれ
をもっている。

一九一八年、オーストリア(当時は奥匈国)崩壊の原因として、彼は、次の要素をあげる。

① 五千万の混住多民族を一千万のドイツ民族が支配し得なかつた。ビスマルク・ドイツと異なつて、オーストリ
アは単一民族のもつ共通の文化的基盤を欠いていた。

② ハンガリーを除き、それぞれの民族に偉大さに対する記憶がなかった。

③ それぞれの地方がその時、対中央叛乱に立ち上がった、プラーグ、レムベルグ、ライバツハ等。

以上をのべてヒットラーは、これらは、ウィーンをもってしても如何ともしがたい現象であったと断定している。

そして国家統合の強力要素としては、①中央集権、②単一の公式言語、③統一された国家意識、④強力指導者、⑤共通の教育、伝統、利害等が存在しなければならぬと主張している。

オーストリアにおける非独活動は、追々顕著なものとなり、ドイツ民族を排除することで、実は、オーストリアは、自らを弱体化させたのである。そしてハプスブルグ王朝は、これに吝かでなくなった。例えば、フランシス・フェルジナンド (Francis Ferdinand) は皇太子となり、チェッコスロバキア出身の彼の妃とともにオーストリアのチェッコ化につとめた。一八六六年のオーストリアの敗戦 (普墺戦争) は、一八七一年のプロシアの対仏勝利が不完全なものであれば、対独復讐戦に立ち上がる契機とさえなったことであろう。オーストリアにおけるドイツ民族優越の喪失が、オーストリア多民族間の相互争いを激化させた、とヒットラーは分析、断定している。³⁾

オーストリアのスラブ化にハプスブルグ家は努力し、このためには宗教的な制度をさえ利用した。ここで雇われたチェッコ人牧師たちは、彼らの利益を教会のそれに優先させ、非独活動の温床となった。しかも汎独運動は、自らカソリック教会に遠慮し、ドイツ人カソリック牧師は、萎縮していた。プロテスタントイズムは、結果においてドイツ利益の擁護に失敗している。このような第一次世界大戦後独墺両国間関係の中で、ヒットラーは、ドイツの再興とドイツによる墺国合併問題を提起する。「最後に私は、最も熱情的で心うちふるう願望、我が愛する祖国を共通の父の国ドイツ帝国 (Gemeinsame Vaterland, das Deutsche Reich) に統合することを何時の日か、必ず達成するその場

所に生活し、活動する幸福を味わうことを望んだ」と。彼は、その達成を誓い、これを人々の心に植え付けることを宣言する。こうしてベルサイユ条約、サンジェルマン条約とともに禁じた独逸合邦を、ヒットラーは一九二五年という時点で、「我が闘争」の中にいとも簡単に真正面から打ち出すのである。

反議會主義

ヒットラーは民族国家主義者であったが、民族の指導者に信頼し、多数支配を排する。こうしてヒットラーは、議會に対して、これを排除する方向をとる。

一八四八年の革命 (Die Revolution des Jahres 1848, フランス二月革命) を階級闘争と規定したのは、大きな誤りであった。それはオーストリアにおいて、新しい民族闘争のはじまりであった、とヒットラーは強調する。このことを忘れて、これを革命的叛乱に利用しようとしたことが、ドイツの運命を封じこんだ。それらは、西歐デモクラシーの精神を振起するのには、役立った。しかしそれは、短期間にドイツ人の存在意義を破壊したのであった。⁽⁵⁾

社会民主党 (die Sozialdemokratie) は、常にドイツ国家に影響する問題において、反ドイツ的態度をとった。総選挙制の導入は、それこそが、ドイツの優越性を数において損なってしまったのだ。「この理由によって」とヒットラーは言う。「私の民族国家保持の本能が、このドイツ人が真に代表されることがない代議政体に、何の眷恋も感じさせないのだ」と。そして彼は、コメディイとして議員が大挙してわめきあい、老議長がヒステリックにベルを鳴らしつづけるか、人影もまばらな議場で議員たちがズッコケて眠っているか、という議會風景を描写している。⁽⁶⁾ こうした反議會主義は、指導者原理の尊重を必然的に導く。議會の多数は、恒常性なく偶発的なものであり、基本的貴族的自然原理に反するが、この近代議會支配制度がもたらした荒廢は、ジュウリイの発行する新聞を無批判に読んでいる人々

には理解できないのである。議会主義の欠点は、以下の如く要約できる。①平凡な議員が入れかわりたちかわり国政を運転し、重大な決定はできない。卑怯と愚鈍さは、多数というスカートの下にかくされてしまう。②短期選出制は、真の指導者の能力を枯渇させる。真に民衆を代表するものが、かえって選出されない。③輿論というのは、操作の創作物である。数日のうちにばかげたエピソードが、重大な国家の活動と規定され、逆に、真にかけがえのない重要案件が忘れ去られてしまう。④内閣は議会の時々多数に基礎を置き、これに嘉みされれば、ほんのすこし長く統治し、失敗すれば直ちに辞職しなければならない。恒久的目的などたてようがない。

ヒットラーは、このように議會を否定するが、それは否定よりも攻撃の面が強い。ドイツの真のデモクラシーとは、と彼は主張する。それは指導者を選ぶ自由選挙であり、彼の行動と怠業に対して彼自らが全責任をとる責任制である、と。

汎ゲルマン主義 (der alldeutschen Richtung)

ヒットラーは汎ゲルマン運動、すなわちドイツ民族を糾合して、ドイツに一大民族国家を創造することに情熱をもやす。彼はウィーンにやってきた時、人々が「ホーヘンツォルラーンに乾杯 (Hoch Hohenzollern)」と叫ぶの聞いて感激する。オーストリアは、この勇氣ある人々にとってはまだドイツ帝国 (das Deutsche Reich) の一部なのだ、と。シュネラー (Georg von Schöenerer) の汎ゲルマン運動が衰退し、キリスト教社会党 (die Christlich Sozialen Partei, 党首 Dr. Karl Lueger) が盛行している現状をヒットラーは、これは、シュネラーが大衆を動員することを忘れたからだと言く。多民族と腐敗した議會に苦しむオーストリアで、上流ブルジョアジーの政治的闘争力は、ただ駄弁を能とするだけでは足れりとしなない。それでは決してこの偉大なる運動の成功を導くことはできない。この

運動は大衆が、新しき教義に開眼し、必要な闘争に立ち上がる決心を宣言した時にのみ、勝利を博する。汎ゲルマン運動こそは、大衆の動員に全精力を傾けるべきである。そしてただ攻撃あるのみ。大胆なる犠牲は、新しき戦士を獲得する以外のものとはならない。①大衆の力無くしては、如何なる高貴にして偉大なるイデーも実現に導かれない。

②汎ゲルマン主義が大衆を忘れ、議会活動にふける時、それは墮落する。③偉大なる革命の内的推進力こそは、大衆の力である。④かくして運動は、街頭に進出すべきである。⑤偉大なる運動は、すべて大衆運動であった。大衆を動かすものは、耽美主義者のレモネードのような甘言ではない。苦悩の女神による大衆の情感に訴える火山の火のような言葉である。汎独運動が、人民を忘れ議会主義に転換する時、それは将来を失い、眼前の安価な成功にのみふけることとなるのである。⁽¹⁾

人口問題と生活圏

ドイツにとっての最大の問題の一つは、人口問題である。毎年約九〇万人が増加する (Bevölkerungszunahme)。これを如何にするか。①フランス流の出生制限は、生存のための闘争原理に反する。これは、弱き者が強者にその席を譲るといふ自然法則に反して、民族の存在を破壊する。②農地の生産性を高めることには自ら限界がある。③世界は、遠からずして人類の存在のための激烈な闘争 (Schwersten Kämpfen um das Dasein der Menschheit) に直面する。ヒューマニティの名の下に、愚鈍、卑怯、物知り顔は、通用しない。④かくして人口増加を処理するためには、領土を拡大して新しき人口に新しき土地を提供する以外、道はない。領土が増大すれば、国防の安定がより大きくなることは、自明の理である。かくヒットラーは、右の極めて短絡的な思考から侵略主義を標榜し、その実行を示唆する。そして国内膨張は、革命的階級闘争という誤解を生じるから、膨張は対外的に遂行すべしとし、もしドイ

ツの先祖が平和主義者であったとしたら、ドイツ領土は、現在の三分の一にも達していなかったと主張する。⁽¹⁰⁾

この膨張主義を實行するとき、展開される外交に關しヒットラーは、一言をたてる。①膨張の方向は、古えのチロートンの騎士た⁴⁹ (*der einstigen Ordensritter*) が辿つた道に副⁵⁰、ロシアをめざす。東への行進が、ヒットラー・ドイツの国是となる。このため、英国との同盟論が展開されねばならない。②東進は、ドイツ後方の安全確保のため、英国との同盟達成によつてのみ可能となる。③ドイツは世界大戦後、英国に対し全艦隊と全植民地を放棄し、対英産業競争を抑制した。④ドイツは陸軍に全力を傾注し、英国はドイツ人口増加のはげ口に理解を示す。⑤一九〇四年に、ドイツが日本の役割 (*die Rolle Japans*) を演じていたら、一九〇四年の流血が、一九一四年—一八年のの一〇倍の流血を避け得たのである。まことに強烈な自信と独断に満ちた外交論であった。⁽¹¹⁾

植民地獲得と世界貿易の政策からは、ロシア同盟が英国に対抗してとりあげられる。英国は必要に應じ、武器をもち決して卑怯ではない。それは世界平和と世界の平和的征服のために、實際上、どれだけの武器を製造し、血を流したか。ドイツはただ、艦隊を必要最小限に、そしてまた防衛上建造したにすぎない。この見地からすればオーストリアとの同盟は、禁止条項である。ビスマルクが必要としたオーストリアは、総選挙制によつて非独活動 (*undutschen wirrwar herabgesunken*) の中心地と変じた。三国同盟 (*der Dreibund*) は、三国の膨張主義にのみ奉仕する。

イタリアは、二人の友人の下を離れ、最後敵に寝返つたのである。①もし大戦がドイツから起つていたら、オーストリアはイタリアと同様の道を辿つたに違いない。オーストリアが中立に止まつた場合、一九一四年においてさえ、スラブ族が革命に立ち上がつて王制を亡ぼしたのであろう。②ドイツが経済発展をめざす限りは、ロシアとの敵対はない。この敵対を刺激するのは、ジュウリイとマルキシストである。ジュウリイは、経済、金融強国であるドイツを敵

とする。③露伊兩國にトルコが加わって独塊を攻め、オーストリアの遺産で肥えふとろうと計画しているのである。⁽²⁷⁾

論

(1) The Age of Nationalism and Reform, Norman Rich 1850-1890, London, 1971, pp. 15-18. この三つを最も効果的に作出しようとする競争の原理が、ここから導き出される。弱者は、智徳、力を欠くが故に弱者であり、強者は、天賦の力と才を有するが故に強者である。これから一方において、民族的優劣の理論が導き出され、白人、アングロサクソン人、チェートン人の優越が、黒人、ゴール人、スラブ人に対して主張され、他方民族の力を弱め、鍛えてその優劣を戦場で決せんとする主張が培われる。ダーウィニズムが、強権国家主義者、人種差別主義者、膨張主義者、マルキシスト等に利用されたことは、非常なものがあつた。

(2) Mein Kampf von Adolf Hitler, Zwei Bände in einem Band, Ungekürzte Ausgabe, Erster Band : Eine Abrechnung, Zweiter Band : Die nationalsozialistische Bewegung, 149.-150. Auflage, 1935, Zentralverlag der N.S.D.A.P. Frz. Eher Nachf., München. Mein Kampf von Adolf Hitler, Erster Band, Eine Abrechnung, 1934, Verlag Franz Eher Nachfolger, G.m.b.H. München 2, No. S.63.

- (3) Ebenda, S.101ff.
- (4) Ebenda, S.136.
- (5) Ebenda, S.80.
- (6) Ebenda, S.83.
- (7) Ebenda, S.95.
- (8) Ebenda, S.106.
- (9) Ebenda, S.98.
- (10) Ebenda, S.143ff.
- (11) Ebenda, S.154f.
- (12) Ebenda, S.160ff.